

Home sweet home.



みなさんは映画「男はつらいよ」をご存じでしょうか。

渥美清演じる車寅次郎こと「寅さん」は、テキ屋を営みながら、気の向くまま風の吹くまま全国各地を巡り、マドンナに出会い、様々な問題を起こします。「わたくし、生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釈天の産湯につかり…」とたんかを切ることで分かるように、根っからの下町っ子であり、いわゆる悪童でした。そして、旅する寅さんが、ふらふらと帰る先は、柴又帝釈天にある団子屋とらや（後にくるまや）です。そこには



唯一の肉親である妹のさくら、育ての親のおいちゃんとおばちゃんがいます。

寅さんは、ありとあらゆる騒動を起こすのですが、現実こんなワガママで自己中心的な大人が周りにいたらさぞ迷惑でしょう。さくらたちも、寅さんの存在には困り果てているのですが、なぜか春が近づくと「寅さんが帰って来るころだねえ…」と店の外に優しい眼差しを向けるのです。

ある日、寅さんが旅から帰って来ると、とらや二階の寅さんの部屋は、他人に貸し出されていました。「なんだっ、勝手に貸部屋にしがって、俺はこの家に不必要な人間か？」と当然ながら激怒します。（まあ、賃借人が女性であるとわかったとたんに態度は一変するのですが…。）

そう、寅さんが唯一いつでも安心して帰ることができる場所が「とらや」なのです。「俺の実家は、田舎の古くて小汚い団子屋でよ…」と言うものの、旅で疲れた心のより所になっています。

生徒たちは三年間の高校生活を終えると様々な道に進みます。近い未来、家から離れ、日本のどこか、また外国で暮らすこともあるかも知れません。そして、仕事や勉強で疲れたり、悩んだり、大きな壁や問題に直面するときがきっと来ます。そんな時、何も考えず安心して帰ることができるのが「家」ではないでしょうか。当然と言えば当然ですが、子どもたちにはそんな当たり前な環境があることを幸せに思ってもらいたいですし、また、将来、そのような平和な時間が流れる空間を作ってもらいたいと願っています。もちろんこの場合の家とは、物理的な家と同時に精神的な「家」も意味します。

トラブルメーカーの寅さんがいなければ、帝釈天参道のちょうど中間に位置しているとらやには、普段は静かで穏やかな時間が流れています。おそらく、こんな時間が流れているからこそ、寅さんは安心して？騒動を巻き起こすことができるのかも知れません。

元気な時もそうでない時も、いつでも帰ることができ、朝まで何も考えずぐっすり眠り、その空間の空気を胸一杯吸いこみ、またふらっと自分の場所に帰って行ける。そんな「家」の大切さを寅さんは、私たちへ教えてくれます。

仕事から離れ、普段感じていることを綴った校長室ブログの番外編です。

さて、私は、寅さんの熱烈なファンで、年数回柴又を訪れます。映画誕生 50 周年を迎えた昨年には、さくらを演じる倍賞千恵子さんや源ちゃんこと蛾治郎さんに会うこともできました。

映画や音楽からはいろいろなことを学ぶことができます。私が寅さんに惹かれる理由は、究極の自由人に憧れると同時に、彼の飛び抜けた羨ましいほどのコミュニケーション能力の高さです。悩む若者には「どうした青年？」と声を掛け、困っているお年寄りがいれば「俺が手伝うか？」とガンガン話しかけ、自分はさておき、他人を幸せにしていく。実在の人物ではないけれど、車寅次郎から学ぶことは多々あり、ぜひ一度じっくりご覧いただければと思います。

文・写真 猪股 成彦

